

「ふしみときは」の中の伊勢物語絵

横 島 菜 穂 子

伊勢物語は、平安時代に成立した代表的な歌物語である。和歌を中心にした章段は、主に在原業平に仮託された男を中心に、恋や友情など多様な人々の心の交流を語り、切なる余韻を伴って胸を打つ。その伊勢物語の絵画化は物語成立直後から始まっていたと考えられ、既に十一世紀初頭の源氏物語にも触れられている。伊勢物語は、その後、各時代を通して親しまれ、美術、文学、芸能など様々な分野に影響を与え続けた。伊勢物語絵に関しては、先学により、平安時代から江戸初期までの作品において、図様が継承され続けたことが分かっている(1)。

本稿で取り上げる「ふしみときは」(2)は、室町後期から江戸初期に流行した幸若舞のひとつであり、読み物、語りものとしても享受され、広義の御伽草子として扱われている。主人公は常盤御前である。夫、源義朝が平治の乱に敗れると、常盤御前も平家の手を逃れて都を離れ、大和を目指す。その途中、雪に降り込められ、三人の幼な子を連れた常盤は、伏見の里をさまよう。哀れなこの場面は、物語の見せ場でもある。幸いに親子は老夫婦に助けられ、この山里にしばらく逗留する。伊勢物

語は、里の女人たちの歓待を受けた常盤御前が、偽りの素性を語ってきかせる際に、妻の嫉妬を戒める引き合いに出したもので、伊勢物語の中でもよく知られた第二十三段の一節、いわゆる「河内越」である。

筑波大学附属図書館に所蔵されている「ふしみときは」(以後、筑波大本と呼ぶ)は、江戸初期の版本である。図書館目録に記載されているように、28丁、寸法は27.5×18.3cmで、奥書に「寛永十二年乙亥二月吉日」とある。出版地と出版者は不明である。岩波新日本古典文学体系の『舞の本』(3)には、国会図書館蔵の「伏見常葉」が翻刻されている。新体系の解説によると、舞の本は江戸初期から寛文までの短期間に流行し、この間で最も広く普及したのは、慶長年間の古活字板を型にした寛永整版本であり、寛永九年(一六三二)の旧刻と寛永一二年(一六三五)以降の新刻の二種類があるという。国会図書館本はこの古刻にあたり、当大学のものは新刻と考えることが出来るだろう。どちらも絵入の十行の版式であるが、新刻は、漢字を仮名に改め、読点を入れ、読み易くなっている。挿絵は同数で、採用場面と絵数が同じである

が、個々の絵の細部は異なる。筑波大本は、「ふしみときは」の中でも、より多くの人々の目に触れたものひとつとして、資料価値があると思われる。

筑波本の「ふしみときは」の挿絵は九図ある。順に、一、帝から義朝が常盤御前を賜った場面、都落ちする常盤親子として、二、橋を渡る親子、三、伏見の雪道をさまよう親子、四、柴の網戸の側に座り、雪を避ける親子、五、庵に招き入れられた親子と続く。ここで六、伊勢物語の絵が入り、最後の三図は常盤御前の前に、庵の夫婦と里の女たちが集う場面で、七、常盤の話聞き入る場面、八、九が常盤を慰めるために女たちが田歌を歌い舞いを舞う場面である。

絵だけを拾って眺めると、劇中劇のように伊勢物語の絵が配され、雪に難渋する都落ちと、舞を伴う祝祭的な終末部とをつなぐ転換点になっている。あらずしを追う挿絵の中で、唯一、主人公である常盤御前のいない図として特異な印象を受ける。伊勢物語を語つてきかせる常盤ではなく、伊勢物語の一場面がそのまま一図として挿入されていることは、伊勢物語の視覚的な定着度を反映するのかもしれない。もちろん「ふしみときは」のなかに伊勢物語が挿入され、それを受けて挿絵があるという順序ではあるが、それにしても絵の内容は、伊勢物語絵として伝えられた絵を転用したものと見られ、伊勢物語絵の独自性が保たれているのである。「ふしみときは」には、奈良絵本や絵巻が多数作られ、その集大成として版本が成立した(4)。初期の奈良絵本の特徴を示すサントリ―美術館蔵の絵巻をはじめ、奈良絵本の多くに、伊勢物語の絵が入っていることが分かっている。

しかし、「ふしみときは」に語られた伊勢物語の「河内越」は、一般に伝わる定家本伊勢物語第二十三段にある「河内越」とは異なっている。説明の都合として、まず、筑波本の伊勢物語の図と対応する本文と比較したあとで、一般の伊勢物語との違いについて述べたい。筑波大本の該当場面は(挿図1)、右上の屋敷の中に琴を枕にして横たわる女の姿があり、左下の秋草に隠れて、男が様子をうかがっている。女のもと

に燈台があり、夜であることが分かる。その火影に誰しも目を疑うのは、女の胸に置かれた器物だろう。全体の構図は整理されすぎた印象をぬぐえないが、女のふくよかな姿態と奇異な行動が、静かな夜の場面に鮮烈である。

常盤の語る伊勢物語は、次の通りである。(前述したように筑波本はかな書きであるが、読み易さを考えて、新大系を参考に漢字に改めた。傍線は新大系と異なる部分である。またルビは筆者)

伊勢物語に伝えたり。夫は大和の者、並び河内の国高安といふ所に、初めて妻を語らひ、これも三歳通へども、後に残れる古き妻の妬むことなかりけれ。男却而思ふやう、「我ならで、余の心があればこそ、われをば妬まざるらむ」と、却而女を妬む。あるゆふぐれに、われは河内へ行き候。暇申て、さらばとて、太刀押つ取り、脇挟み、河内へ行かずして、南面の花園に夜もすがら隠れ居て、妻女の体を相見るに、あら無慥や、この女、これをば夢にも知らずして、持仏堂に参り、仏前に向かひ、香を盛り花を摘み夜すがら琴を引き鳴らし、恨み泣ひてぞぬたりける。夜半斗に此女、白き提子に水を入れ、胸の間に置きければ、必ず湯にぞなりにける。捨てては水を入れ、夜すがら胸を冷やしける。これは、三歳が其間、妬しと思ふ心ざし、色には出さ

ざりけるが、焰となりて、煮にけり。すでに暁の鐘聞く頃にも成しかば、苦しげなる息をつぎ、これより河内の高安へは、竜田越と申て、悪所の有と聞くものを、いつの日の何時か、この山にて我夫の死せんず事の悲しや」と思ひ連ねて此女、一首の歌をぞ詠じける。

風吹けば沖つ白波竜田山夜半にや君がひとりゆくらむ(5)

と、かやうに詠じたりければ、夫この由聞くよりも、「賢臣二君に仕へず、貞女両夫に見ずと、今こそ思ひ知られたれ。姿掛かりの勝る女はありとても、心の勝る女房のありつへしとも覺えず」とて、河内通ひを思ひ切り、古き妻にぞ契りける。それを誰ぞと尋ぬるに、在五中将なりとかや。

大和の男が河内の高安に、新しい妻をつくり、三年間通のたが、元の妻は少しも妬まなかつた。男は自分以外の男を思っているのかとかえつて疑いを持ち、あるとき河内へ行くふりをして、庭の前裁に隠れて女の様子をうかがつた。何も知らない女は、持仏堂に折り、琴をひき、夜中に水を入れた土瓶型の容器を胸の間に置いた。すると水はたちまち嫉妬にたぎつて湯になる。女は水を何度も取り替えて、嫉妬の焰を冷やして過ごし、暁の鐘が聞こえる頃、「危険な竜田山を夜中にあなたはひとり越えているのでしょうか(訳は新大系)」と夫を案じる和歌を詠んだので、男は、姿や様子の勝る女があつても、心の勝る妻はいないと、河内越をやめ、元の妻の元に帰つた。この

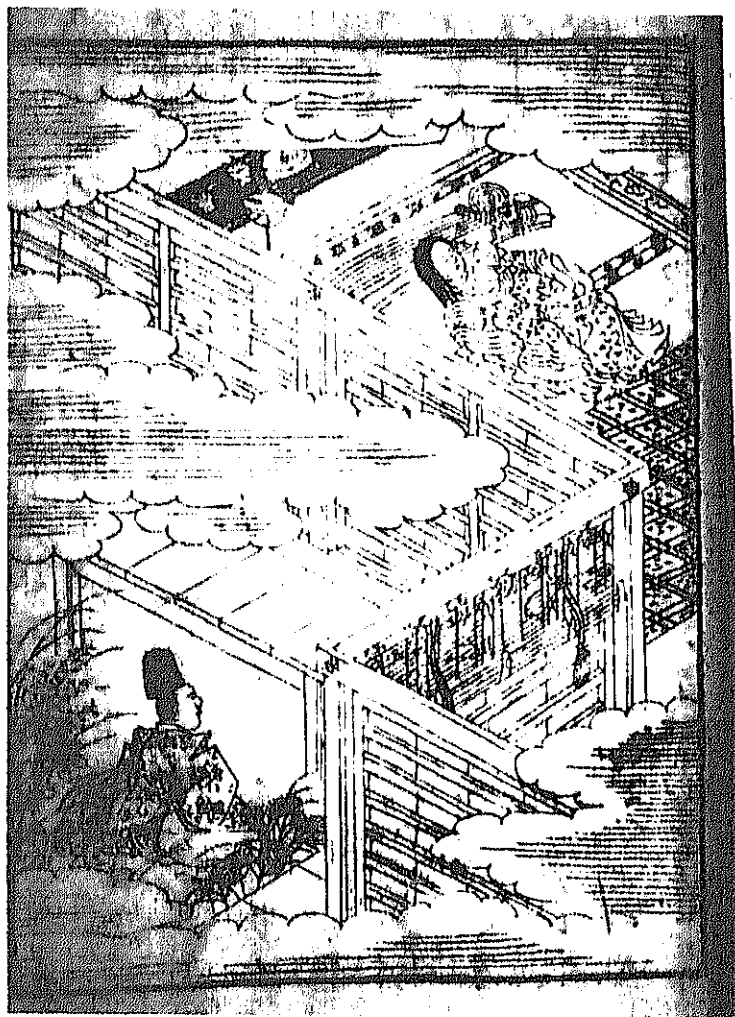
男は在五中将、つまり在原業平のことだという。

絵(挿図1 挿図2)は、このような常盤御前の語る伊勢物語に対応する。男のたずむ秋草が本文の花園であるのをはじめ、囃中の仏前の香や、琴、胸の間に提子を置く女の様子はすべて叙述から来たモチーフである。国会図書館本でもほぼ同じ構図をとり、草中に座る男と、屋敷で焦がれる胸を水でひやす女の姿が描かれている。ただし屋敷は、筑波大本のように鉤型に入り組まず、前裁に開いた屋敷であり、よりの様子を探りやすい舞台になっている。

画中の女は、夫には嫉妬にたぎる胸のうちを見せず、ひとりで必死に鎮めようとしている。激しい場面にもかかわらず、人形のように穏やかな表情や、撫子文様とおぼしき衣に包んだ身体のみねり具合は、いじらしい妻の心根を優雅にまとめている。

しかし、常盤御前の語つた伊勢物語は、鎌倉時代に成立し、現在まで伝わる一般の定家本伊勢物語ではなく、新大系の脚注に指摘があるように、古今集の左注や、同じ平安時代の歌物語である大和物語とつながる。「風吹けば」という和歌は、成立年代順に古今集、伊勢物語、大和物語の三作品に収められ、いずれも夫を送り出した元の妻の歌として、隠れていた夫の琴線に触れるのだが、三作品において顕著な相違は、待つ女の様子である。定家本伊勢物語では、女は、念入りに身だしなみを整えて、ほんやり遠くを見るときも和歌を詠む。伊勢物語では、男に捨てられても、化粧など妻らしいしなみを忘れない、内面的な女的美徳を静かに語るのだが、大和物語では、同じように和歌を詠んだ後、泣いて、金椀に水をいれて胸を冷やす。常盤御前の語る女は、用いる器こそ、白い提子(土瓶型の銀製容器。酒などをあたたためて杯につぐためのもの「新体系注」と、金椀(金属製の椀「評釈注」との違)こそあれ、この大和物語の女に近い。また琴を引き鳴らすことは、伊勢物語定家本には見られず、古今和歌集の左注にあり、伊勢物語の古い本文を伝えるとも考えられている。

挿図1「ふしみときは」より第六図



挿図2 部分拡大図



◆伊勢物語第二十三段 河内越の部分(本文は新潮古典集成(6))

さて年々この程のほどに、女、親なれたよりなくなるままだ、もろともにいふかひなく
てはあらむやとはとて、河内の国高安の群に、いき通う所いでにけり。さりければ、この
もとの女、あしと思へるけしきもなくて、いだしやりければ、男、こと心ありて、かかる
にやあらむと思ひうたがひて、前裁の中にかくれぬて、河内へいぬる顔にて見れば、こ
の女、いとようけさうじて、うちながめて

風吹けば沖つしら波たつた山

よはにや君がひとりこゆるむ

とよみけるをまきて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へいかなすなりにけり

◆大和物語第一四九段部分(本文は大和物語評釈 下巻(7))

てあらむやはとて、河内の国高安の郡に、いき通う所いでにけり。さりければ、この
もとの女、あしと思へるけしきもなくて、いだしやりければ、男、こと心ありて、かかる
にやあらむと思ひうたがひて、前裁の中にかくれぬて、河内へいぬる顔にて見れば、こ
の女、いとようけさうじて、うちながめて、

風吹けば沖つしら波たつた山

よはにや君がひとりこゆるむ

とよみけるをまきて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へいかなすなりにけり
さて出でていふと見え、前裁の中に隠れて、男、や来るとみれば、端に出でて、月
のいみじうおもしろきに、頭、かい梳りなどしており。夜更くるまで寝ず、いといたう
うち嘆きてながめれば、人待つなめりと見るに、使ふ人の前なりけるにいひける。

風吹けば沖つ白波たつた山夜はにや君がひとり越ゆるむ

と歌みければ、我が上を思ふなりけりと思ふに、いとかなしうなりぬ。この今の妻の
家は立田山越えて行く道になむありける。かくてなを見をりければ、この女うち泣
き臥して、金梳に水を入れて胸になむ据へたりける。「あやし、いかにするにかあら
む」とてなをみる。されば「この水熱湯にたきりぬれば、湯あてつ。又水を入れる。見るに
いとかなしくて走りいでて、「いかなる心ちし給へば、かくはしたまふぞ」といひて、か
き抱きてなむ寝にける。かくてほかへもさらに行かで、つとぬにけり。

◆古今和歌集 雑下

(本文は新日本古典文学大系(8))

題しらす

よみ人しらす

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆるむ

ある人、この歌は、昔、大和国なりける人の女に、ある人、住みわたりけり。この女親
もなくなりて、家も悪くなり行く間に、この男、河内国に、人をあひ知りて通ひつ、
離れやうにのみ成り行きけり。さりけれども、つらげなる気色も見えて、河内へ行く
ことだ、男の心のいづくにいつつ出しやりければ、怪しと思ひて、もしなき間に異心
もやあると疑ひて、月の面白かりける夜、河内へ行く真似にて、前裁の中に隠れて見
ければ、夜更くるまで琴をかきならしつ、うち嘆きて、この歌をよみて寝にければ、
これを聞きて、それより又他へもまからず成りにけり、となむ言ひ伝へたる

常盤御前の語った伊勢物語は、以上のことから、今日伝わる伊勢物語とは異なり、
挿絵の女は、伊勢物語絵の中には描かれない姿であることが確認できた。また持仏
堂に参り、仏の靈験を匂わす点などは、いかにも中世らしい要素である。しかし、こ
のような女の様子や仏前の景などを除くと、この図様の基本的な枠組みは、伊勢物

語絵の中で、近世初期に尤も流布した嵯峨本伊勢物語(初版は慶長一三年の木版本で、再版を重ねた版本も出された)の第二十三段「河内越」によく似ているのである。慶長一三年の嵯峨本伊勢物語では、右上の屋敷に女を、左下に男を配し、やはり男は秋草の中に座って様子をうかがう。屋敷は庭に面しており、左上方から右下方へ、建物の縁を用いて縦長の画面を分断し、男女の配する点では、筑波本より国会図書館本の図の方が、さらに近い構図になっている。数少ない作品例で、図様を系統づけてはならないが、「ふしみときは」にある絵は、江戸時代にあつた伊勢物語絵を利用し、本文との相違点を描き加えて創造したものと予想される。

平安時代から江戸初期までの伊勢物語絵において、「河内越」には女が琴を弾くか、傍らに琴を置く作例が一般的である。定家本伊勢物語にない記述が、描かれている理由として、定家本伊勢物語が整う以前に、すでに伊勢物語絵の図様が成立し、その典拠となつた古い伊勢物語本文には、古今集にあるような「琴をかきならしつ」といふ一文が存在したことが想定されている。一度定型化し、人々の目に慣れた図様は、物語本文とは運動せずに伝わり、物語における一般的な絵と本文の関係である。「ふしみときは」に語られた伊勢物語はまさに河内越であり、この章段の図様は、物語本文とは別系統に、琴をひく女として伝えられていた。しかし常盤御前の話とは女性の表現に相違点があり、しかも話の上で重要な女の動作であつたため、「ふしみときは」の絵においては、水を胸にあてて嫉妬を静める女性の姿にいつのぞか描き改められたのだろう。

もちろん、挿絵の系譜については、本文の系統と絡め、数多くの作品を管見してから、はじめて考えられる問題である。同じ室町時代の芸能には、世阿弥も関わつたとされる能「井筒」があり、これも主に伊勢物語の「河内越」の女を基にしてゐる。「ふしみときは」では、悲運に立ち向かう常盤御前という女性を気高く描く。また「河内越」は、業平に仮託される昔男ではなく、むしろ女性の内面に触れた点において、伊

勢物語の中でも数少ない章段である。「ふしみときは」において、常盤御前と大和の女のイメージとは、反響しあい、人々の胸を打つたのだろう。それに呼応するかのようには、画中の女性も美しく描かれる。物語においては、厳しさを備える人物造型ながら、柔らかい和紙に刷られた常盤御前のふくよかな母らしい姿も、大和の女も、紙の質感と調和して、柔和な面差しに気高さを備え、図版では伝えることの出来ない、えもいわれぬやさしさをたたえている。「ふしみときは」の二図は、中世以降における伊勢物語享受史の一例として、文学、芸能、美術の接点にあり、伊勢物語の裾野の広さを現在に伝えているのである。

註

(1) 伊勢物語について

片桐洋一『伊勢物語の研究(研究篇)』明治書院 1968

『伊勢物語の研究(資料篇)』明治書院

『伊勢物語の新研究』明治書院 1979

伊勢物語絵について

伊藤敏子『伊勢物語絵』角川書店 1984

千野香織『伊勢物語絵』至文堂 1991

図録『伊勢物語の世界』五島美術館 1994(なりを参考にした)

(2) 本稿の表記は、筑波大学附属図書館の目録に従い「ふしみときは」に統一しているが、「伏見常葉」「伏見常磐」と表記されることもある。

幸若舞のこの話と直接の関係は希薄だが、平治物語の常磐の巻について

日下力『平治物語の成立と展開』汲古書房 1997

久保田淳一『平治物語の常葉』国文学 解釈と鑑賞 1982.9 増刊号を参考にした

(3) 伏見常葉 北原保雄 新日本古典文学大系『舞の本』1994

解説 麻原美子 右同

(4) 田中文雅『御伽草子と語り物』『ふしみときは』松入本を中心として

国文学 解釈と鑑賞 至文堂 1990.10

(5) 定家本伊勢物語では、和歌は「ひとりこゆらん」とするが、この本文のように「ひとりゆらん」とする伊勢物語の本文は比較的多かった。片桐洋一『関西大学本『伊勢物語知識集』

について 図書館フォーラム第七号 2002

(6) 新潮古典文学集成『伊勢物語』渡辺稔 1978

(7) 『大和物語評釈 下』今井源衛 笠間書院 2000

(8) 岩波新日本古典文学大系『古今和歌集』小島憲之 1989